

サッカー観戦のすすめ

僕が最初にサッカーの試合を観たのは今から 14 年前の 2006 年、ドイツで行われていたワールドカップであったと記憶している。その年の 8 月には初めてスタジアムで観戦した。当時の記憶はほとんどない。しかし、それから現在まで続く最高の余暇と出会ったこの年は僕の人生を決定づけたと言っても過言ではない。

大体のサッカー好きがそうかもしれないが、僕はスタジアムで試合を見るのが好きである。スタジアム観戦には、テレビ観戦にはない醍醐味が 3 つある。

まず試合について言うと、テレビとは見え方が全く違う。サッカーでは選手が 1 試合 90 分の間にボールに触れる時間はわずか 2~3 分と言われている。選手にとってはボールを持っていない時間の方が圧倒的に長く、ボールを持っていない選手の動き、ポジショニングを観察することもサッカーの楽しみ方の 1 つである。ボールのない場面をじっくり見られるのはスタジアム観戦の特権であり、テレビでは味わえない楽しみである。

次に「チャント」と呼ばれる、各チームの応援歌を聞くこと。チャントには各チームサポーターの個性が表れる。北海道コンサドーレ札幌や浦和レッズは聞いているこちらが身震いするほど、いつも声量が凄い。鹿島アントラーズのチャントは歌詞がシンプルで歌いやすく、声に重厚感がある。僕が一番好きな清水エスパルスのチャントは思わず口ずさんでしまうような、サンバのリズムで軽快なものが多い。チャントを聞くだけでもスタジアムに行く価値がある。もっといろいろなチームのチャントを聞きに行きたい。

試合以外の楽しみもある。スタジアムの雰囲気や景色、スタジアムグルメなどは楽しみの 1 つ。遠方のスタジアムを訪ねた時には、試合の前後に観光もする。

初めてスタジアム観戦をしたのは鹿島アントラーズの本拠地がある茨城県の鹿嶋であった。この鹿嶋、スタジアムの周辺には何もない。だからこそ海沿いを車で走っていて、突然にスタジアムが視界に飛び込んできたときの興奮は大きい。鹿嶋には 5 回ほど行ったが、試合後は行きつけの、クマのマークが目印の旅籠屋に宿泊し、翌日に大洗のアウトレットや水族館に行き、寿司を食べるのが定番であった。良い思い出である。

清水エスパルスの本拠地がある静岡県の清水も印象深い。スタジアムが割と標高の高い場所にあり、周囲を森に囲まれていてとても良い雰囲気。座席からは富士山が見え、富士山を横目にサンバのチャントを聞きつつ、試合を見ながら食べる静岡県の B 級グルメ「富士宮やきそば」はとても美味しい。何回でも行きたくなるスタジアムである。

昨年 10 月には、ずっと行きたいと思っていたガンバ大阪のホームスタジアム「パナソニックスタジアム吹田」を訪ねた。大阪府吹田市にあるこのスタジアムは税金を使わず、寄付金で作られたという。あの雰囲気と臨場感は吹田でしか味わえない。世界でも有数のスタジアムだと思う。毎試合あんなに素晴らしいスタジアムで試合が見られるガンバのファンが心底羨ましい。また最寄り駅の目の前には、1970 年の万博の際に作られた「太陽の塔」があった。思いがけない観光ができて得した気分であった。

仙台、松本、京都、北九州など、まだまだ行ってみたいスタジアムは多い。特に北九州はすぐ隣が海で、よくボールが「海ポチャ」するらしいので気になる。今後もサッカーのある生活を楽しみたい。

「No Music No Life」

ありきたりなタイトルだ。単純なことの方がわかりやすい。「音楽なしでは生きて行けない。」まさにその通りだ。今まさに音楽を聴きながら、この文章を打ち込んでいる。私の人生において音楽の存在は、欠かすことができない重要な存在になっている。これまでに生き抜いてきた二十数年の間に、ふとしたときに耳にした音楽に救われてきた。何かに諦めかけてしまいそうになった時に負けないように奮い立たせてくれた曲、人生に病んだ時に助けてくれた曲、あまり仲良くなかった人と仲良くなるきっかけになった曲、学園祭でバンドを組んで初めて人前で演奏した曲など、思い返せば人生の様々な地点で様々な音楽と触れ合ってきた。と言うことは、私の余暇のほぼ全ての時間に音楽が関わっていたと言っても過言では無いのではないか。私語りをするのは何だか気恥ずかしいが、私の人生に大きく影響を与えた音楽について少し語りたと思う。

高校二年生の時、部活の練習中にケガをした。病院に行って診てもらったところ、治るのに一年はかかると言われた。高校生最後の大会に間に合わない。何のためにこれまで頑張ってきたのか。絶望だった。同情されることすらツラかったので、すぐに耳を塞ぐために音楽に逃げた。でも、求めていた曲はなかった。どれもこれも「頑張れ頑張れ」と応援してくる曲ばかりだった。輝く可能性を秘めた人間の背中を押す曲はそこら中にあったが、もう輝く術を失った人間の逃げ道を作ってくれる曲にはなかなか出会えなかった。が、何だかんだで見つけたのが Aqua Timez だった。

彼らの音楽は優しかった。私の持つ弱さを肯定してくれた。Aqua Timez の代表曲に「決意の朝に」という曲がある。「ツライときツライと言えたらいいのになあ」この歌詞にどれだけ支えられてきたことか。この曲を初めて聴いたときボロボロ泣いたことを覚えている。映画で泣いたことはあったが、たった五分ほどの曲で泣かされるとは思ってもいなかった。

私が思うに、Aqua Timez は人間の持つ不安な感情や弱さといったものを包み込んで肯定してくれるような曲が多い。その中で、無理して頑張らなくていい、弱いのは自分一人だけじゃないことを教えてくれる。「決意の朝に」の他にも、数々の号泣ソングを生み出している。ドラマ「ごくせん」の主題歌にもなった「虹」や、誰かに助けってもらうことは決して悪いことではないと気づかせてくれる「ヒナユメ」など紹介したい曲ばかりだ。そんな名曲たちの中で、特に心に残っているのが「ALONES」だ。曲名からも分かる通り孤独を歌った曲だ。個人的な解釈になるが、ALONE とは一人きりを意味する。その ALONE に～S を付けることで複数形になる。つまり、一人きりたちという意味になり、「同じような一人きりの人がいるから、君は一人じゃない。」という何ともオシャレなメッセージを持っていると勝手に考えている。

苦しかったときに助けてくれた Aqua Timez だったが、昨年突然のバンド解散を発表した。非常に残念だったが、それ以上に感謝の気持ちが勝っていた。

本当はもっとたくさんのバンドや曲を紹介するはずだったが、熱が入りすぎて Aqua Timez だけの紹介になってしまった。手軽に音楽を聴くことができる時代になり、多くの人が音楽を日常の何気ない「音」として聞いているような気がする。たまには、一つの曲や音に感性を働かせて聴いてみてはどうだろうか。

2019 年度後期 スポーツ・余暇政策 優秀エッセイ 4 本選出！

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」

「木曜食道楽」

3年生の前期の木曜日は、よく友人と連れ立って外へ昼ご飯を食べに行っていた。

きっかけは友人の「学食は混んでいるし、次の授業は4コマからで時間もあるから、少し外に食べに行かないか」という言葉からだ。今までほとんどの昼ご飯を学食か学内のミニストップで済ましていた私にとってそれは嬉しい提案だった。そうして、友人数人で一緒に行ったのが陽東キャンパス近くの中華店「小籠包 Garden 大地」である。

店に入ってみると、木の暖かみを感じられる落ち着いたところで、今まで大学が終わったらすぐに帰っていた私にとって、こんなおしゃれなお店が大学の近くにあることは驚き以外の何物でもなかった。メニューはエビチリや麻婆豆腐といった中華の定番料理に台湾小籠包がついたランチセットに加え、なぜかカレーライスもあったのだが、その中で私は油淋鶏のランチセットをいただくことにした。しばし友人同士で歓談しながら料理を待っていると、せいろに入った小籠包がやってきた。ほかほかの小籠包をせいろかられんげに移し、箸で薄皮を静かに破る。すると、中から熱々のスープがあふれ出していく。そっとれんげをすすってみたら優しい肉汁のうまみと甘みが口いっぱい広がった。こんなに美味しい小籠包は生まれて初めてだった。小籠包を食べた時の衝撃が冷めやらないまま、今度は油淋鶏が運ばれてきた。これもまたたまらない味で、サクサクの衣にさっぱりとしたタレがちょうどよいバランスで絡み合い、白米を掻き込むペースを急き立てたのを覚えている。

その日以来、木曜日の2コマ終わりの余暇は美味しいご飯を巡る小旅行の時間になった。メンバーはその時々課題の有無や忙しさで変わったが、平均して4人、多いときは6・7人でぞろぞろと店に向かうこともあった。そして旅のルールは4コマの授業には間に合うよう学校に帰ってくるということ。このルールを守りつつ、実に様々な店を訪れていた。

思い出深い店の1つとして、ケーヨーデイツーの前にある定食屋「いつも」がある。名前的に毎日やっているようだが、決してそういうわけではない。私も最初行こうとしたとき、店先で休業していることを知ってがっくりと肩を落としたことがあった。しかし、餃子の味が家庭的でどこかほっとするような味と、手ごろな価格でしっかりとした量のご飯が出てくるので個人的に好きな店である。他にも肉料理が旨い「友雅亭」や、今は閉店してしまったが、ボリュームのある唐揚げと豚骨ラーメンが人気の「とんこつ家」も素敵なお店だった。

授業が少し早く終わった日は、友人が車を出してちょっとした遠出をしたこともあった。ある友人がオムライスを食べたくなかった時はインターパークまで行き、またある時は大谷で新しく出来たパン屋にも足を運んだ。

食事は気心知れた友人と一緒に食べれば、何倍にも美味しくなる。残念ながら、授業やゼミの時間が合わず、最近では外に出て食べに行くことはなかなか難しくなりましたが、時間が出来たらまた外で素敵な時間を過ごしたいものである。

「やさしいよる」

大学に入学してから1年が経とうとしている。言いかえれば、1年前の私は受験生だった。私の大学受験を振り返ると、不思議と楽しい思い出ばかりが思い浮かぶ。放課後に教室に残り、施錠間際まで自習をした後、消灯されかけた校舎をおしゃべりしながら友達と歩いたこと。学校からの帰り道、自転車を走らせながら感じた夜風。自習のために訪れた図書館でふと手にした、村上春樹の『アフターダーク』。センター試験対策の問題集に掲載されていた、村田沙耶香の『街を食べる』の夜の街の描写に虜になり解答することも忘れて読んだこと。改めて考えると、私の大学受験の記憶は夜にまつわった心躍るものばかりだ。

幼い頃から夜という時間帯に心惹かれていた。大学受験を控えたあの期間は、私にとって夜の時間帯がより身近なものになったときだった。活動の少ない部活に所属し夕方に帰宅していた生活から、自習のためにどっぷりと日が暮れた学校に残る毎日になった。夜の街は、1日の労働を終えたどこか気だるげな人々と、学生や会社員が帰り消灯された静寂の建物、それとは対照的に人々の生活を裏付けるように照明が灯る建物など、静寂の中にも確かに何かが動いている感覚がある。そして、冷たさの中にも昼間の暖かさはらんだ風がお疲れさまと言っているかのように街の全てを包み、通り抜けていく。私の大学受験の思い出は、そうした夜にまつわる身体的な感覚とそれを言語化してくれる文章によって構成されているのだ。

どうしてこれほど、当時の私にとって夜の存在がきらきらと美しく、心躍る対象なのだろうか。受験期も佳境。どんなに否定しようと、大学入試という存在に向かって時は進んでいく。そして授業や友人との会話の中でそれを自覚せずにはいられない。受験対策づくめの1日を終え、肩や思考さえこわばったように感じられるときに、夜の暗さにほっと息をつく。自宅へと自転車を走らせながら夜の街の静寂と煌めきに身を浸す。学校からの帰り道、夜という空間の中で1日の活動の疲れを癒し、気持ちを切り替え、活力にする。これこそ、余暇の姿だろう。受験を控え、余暇を満喫できないときだからこそ学校と自宅との間の身近な時間や空間の中に余暇の対象を見出していたのではないか。あんなにも余暇や気分転換の対象が日常生活と密着していたのは、大学受験のあのときだけだったのではないか、と考える。

大学に入学してから1年が経とうとしている。大学生になった今でも当時の通学路を通ることがある。当時と同じようにペダルに足を乗せていると、あの時の満ち足りた感覚が思い出される。夜の街での身体的な感覚やそこから得られる感情が形をもつとしたら、今の私が抱くそれらよりも当時の方が研ぎ澄まされて、クリアで、輪郭ははっきりとしている。今の私があの時と同じ空間に身を置いていても、当時の自分ほど心を動かされることはないのだろう。

受験期に戻りたい、とまでは思わないが、受験という時期そのものの稀少性も相まってあのキラキラとした思い出は近いようで遠い、憧れになりつつある。